論 文 内 容 の 要 旨

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻生活健康科学プログラム
２０１６年度入学
（氏名）杉　本　　洋　一（すぎもと　よういち）

１．論文題目

自己理解・他者理解の促進を通じて寛容性を高める教育プログラムについての検討

２．論文要旨

人間は社会的動物である。人間は、集団の中で他者と助け合うことを通じて、単独ではできないことや環境への適応を成し遂げてきた。しかし、この社会的相互作用の過程では、争いや葛藤を乗り越えていかねばならないことが多く発生する。そのため、寛容であるという性質や傾向が重要になる。

一方、社会が多様化し変化が激しくなっていく中で、異なる分野の知識や経験をもった人々が協働して価値創造に取り組むことがますます必要になっている。そこでは、他者への寛容を育成することにとどまらず、「自己と相違する他者の異質性と、他者と相違する自己の異質性を、尊重の念をもって受け容れること」（本研究における寛容の操作的定義）を促進し、自他の特徴の違いを理解し活かしあえる知識と志向性を高めていくことが重要になる。本研究で教育効果を検討した教育プログラムとは、自他の間に異質性を感じたとしても、その原因と活用のあり方を理解・納得しやすくすることで、建設的・互恵的な協働を促進しようとするものであった。

この教育プログラムは、Ｋ大学創造工学部の１年生が必修で履修する基礎教育科目として開発したものであった。この教育プログラムの主たる特徴は、教育プログラムの設計でとった次の３つのアプローチにある。一つ目は、学習の次元を用いた単元設計のモデル１を踏まえ、教育プログラムの基軸に「自己理解・他者理解・寛容性向上」を位置づけたことである。

すなわち、「自己理解」「他者理解」「寛容性向上」という個々の学習成果の関係を次のように仮定した。まず、タイプ論の３つの指標を座標軸として自己理解が促進される。自己理解が深まることで他者理解も深まっていく。また、他者理解が深まることで、さらに自己理解が深まっていくという逆の関係も起こる。そのようにして「自己理解」と「他者理解」が段階的・循環的に促進されるプロセスを通じて（あるいは、その結果として）寛容が育成され寛容性も向上する、と

いう仮定であった。

本研究の目的は、この仮定の検証と検討であった。なお、寛容性向上を集団内の心理的安全性の向上に円滑につなげていくためには、学習者が、自他の特徴を考えながら相互作用の成り行きを想定し状況適応的なふるまいをしていくことや、その体験の内省を言語化して成功の再現性を高めることが、非常に重要になると考えた。

二つ目は、ユングのタイプ論の導入・利用にあたっては、ボトムラインの発想により必要最小限の範囲にとどめたことである。いわば、ローエンド型の利用にした。これは教育プログラムの実施を容易にするためにも必要であった。三つ目は、ユングのタイプ論の利用における倫理面の遵守に細心の注意をはらっていることである。たとえば、タイプ論の利用で陥りがちな危険として自他のタイプに関する「決めつけ」があるが、そのようなことが起こらないよう説明・指導を十分におこなった。このような三つのアプローチをすべて具備する教育プログラムは、国内外の先行研究のうちに未だ存在していない。それが、教育プログラムを開発した動機であった。

このような特徴をもつ教育プログラムも教育現場への導入から４年目になり採取データも蓄積してきた（履修者の累計 1,188 名）ことから、その教育効果を検証し検討することとした。検証にあたっては、「自己理解」「他者理解」「寛容性向上」に対応した３つの研究課題と計７つの検証仮説を設定した。また、検証仮説とは別に実施した補足的な検証も、終章で付論として提示した。本研究は、ユングのタイプ論を利用して自己理解・他者理解・寛容性向上を段階的・循環的に促進しようとした教育プログラムが、プロトタイプとして有効に機能したかどうかを実証的に検討する試みであった。

さて、本論文は、全６章で構成されており、まず前半の序章から第２章までで、本研究の基本認識と研究課題、本研究の位置づけ、本研究の目的、教育プログラムの主要な概念と先行研究の説明、用語の操作的定義、教育プログラムの開発目的・設計骨子・カリキュラム内容・実施状況を明らかにした。次に後半の第３章から終章までで、研究デザイン、検証の概要と手続き、倫理的配慮、各検証仮説の検証結果と考察、各章要約、本研究の成果と課題、今後の展望、付論を提示した。具体的には、以下のとおりであった。

序章では、教育プログラムで高めていく寛容性を明らかにするとともに、その寛容性を高めるために、認知スタイルに着目してユングのタイプ論を利用したことを論じた。そして、本研究の基本認識を示したうえで、教育プログラムの検討をおこなうための３つの研究課題を明らかにした。また、先行研究、本研究の位置づけ、研究目的を示した。

第１章では、教育プログラムにかかわる鍵概念の文献検討をおこなった。その中で、寛容性向上に関連するシティズンシップ教育、自己理解・他者理解の枠組みとして導入・利用したユングのタイプ論、先行研究である MBTI と Teamology について論じた。また、先行研究に対する問題意識を示すことで、教育プログラ

ムが、どのような観点から何を重視しようとしたのかを明らかにした。

第２章では、教育プログラム開発の背景にあった問題意識を明らかにするとともに、開発目的と設計にあたっての基本的な考え方を示した。また、標準的なカリキュラムと運営上の留意点を示した。そのうえで、講義で扱うテーマを明らかにするとともに、演習で使用するミッション（課題指示書）を示した。最後に、教育プログラムのこれまでの実施状況の概要を説明した。

第３章では、研究デザインが量的研究であることを示した。そして、３つの研究課題のもとに設定した計７つの検証仮説（= 期待する教育効果）の検証手続きを示した。検証手続きの説明では、調査対象者、提供した教育内容、期待する教育効果の内容、教育効果の確認に用いた検証方法、補足的におこなった傍証についての検証方法を示した。３つの研究課題と計７つの検証仮説は、次のとおりであった。なお、検証仮説の番号は通し番号とした。

【研究課題１：自己理解についての教育プログラムの効果を確かめること】

①「検証仮説１：教育プログラムにより、構えのタイプの仮説がもてるようになる」、②「検証仮説２：教育プログラムにより、知覚機能のタイプの仮説がもてるようになる」、③「検証仮説３：教育プログラムにより、判断機能のタイプの仮説がもてるようになる」。

【研究課題２：他者理解についての教育プログラムの効果を確かめること】

①「検証仮説４：教育プログラムにより、他者のタイプを推定できるようになる」、②「検証仮説５：教育プログラムにより、自己のタイプが他者のタイプに与える相互作用を考えられるようになる」、③「検証仮説６：教育プログラムにより、他者のタイプが自己のタイプに与える相互作用を考えられるようになる」。

【研究課題３：寛容性向上についての教育プログラムの効果を確かめること】

①「検証仮説７：教育プログラムにより育成された寛容が、言語化されて意識されるようになる」。本章の最後に、本研究は、研究倫理審査委員会の承認を得ていることを述べた。

第４章では、第３章で提示した検証手続きに従って、検証仮説を検証した結果（分析対象者、教育効果の検証結果、傍証としておこなった検証の結果）を示すとともに考察をおこなった。なお、分析対象者は、原則として、教育プログラムの実施４年目の履修単位取得者であった。結果と考察の概要は、次のとおりであった。

検証仮説１、検証仮説２、検証仮説３については、「タイプの仮説構築の有無」と「仮説構築の理由の記述内容」について検証した。分析対象者全員が、タイプ論の講義内容を踏まえたロジックにより仮説タイプを構築できた。

検証仮説４については、他者のタイプを推定する方法の理解程度を検証した。分析対象者の自己評価の上位評値の割合が８割を超えたことなどから、分析対象者の理解は問題のない水準に到達していることが窺われた。

検証仮説５については、自己のタイプらしさのあらわれである「ふるまい」が、他者のタイプにとってはヒューマンエラーの起因になるようなことを、他者の

身になって考えられるか検証した。分析対象者全員が、タイプ論のフレームワークを座標軸にして具体的な記述をすることができた。また、傍証としておこなった検証では、自他のタイプの組み合わせによって記述内容に特徴があることも示された。

検証仮説６については、他者のタイプらしさのあらわれである「ふるまい」が、自己のタイプにとってはヒューマンエラーの起因になるようなことを考えられるか検証した。分析対象者全員が、タイプ論のフレームワークを座標軸にして具体的な記述をすることができた。また、傍証としておこなった検証では、自他のタイプの組み合わせによって記述内容に特徴があることも示された。

検証仮説７については、教育プロクラムによって育成された寛容を示す語が、分析対象者の期末レポートの自由記述を集約したテキストデータにおいて確認できるか否かを検証した。計量テキスト分析によって得られた結果（頻出語、出現パターンの似通った語、共起の程度の強い語）からは、自他の間の異質性を尊重の念をもって受け容れようとする意識があること、また、お互いの異質性を互恵につなげていこうとする志向性が活性化していることがわかった。

終章では、前章までの各章の要約を示した。そのうえで、本研究の成果と課題、今後の展望を述べた。

教育プログラムの教育効果の検討によって得られた本研究の成果は次の５つであった。第一に、自己理解に効果があることを検証できたこと、第二に、他者理解に効果があることを検証できたこと、第三に、教育プログラムが、寛容性を高めることに効果があることを検証できたこと、第四に、教育プログラムが、タイプ論のいわばローエンド型の仕様によって所期の教育効果を出せることを検証できたこと、第五に、教育プログラムの教育効果を確認できたことが社会実装に向けた準備になったことであった。

次に、課題としては、本研究の限界と表裏の関係になるが、検証結果を一般化していくためには、調査対象の拡大をはからなければならないなどをあげた。今後の展望としては、タイプ（認知スタイル）の違いを、争いや葛藤の原因にならないようにすることだけでなく、互恵と紐帯のための認知資源として活用していくために、教育ニーズに合わせた教育プログラムの改良と社会実装に向けて取り組んでいくことを述べた。

最後に、本研究の目的とした検討については、上記の７つの検証仮説の検証・検討により終了したことを述べたうえで、教育プログラムの妥当性や教育効果を補足的に確認する観点から４つの検証をおこなったことを述べた。そして、その結果と考察を付論として提示した。４つの検証とは、「リーダーシップの発揮に対する教育効果の検証」「フォロワーシップの発揮に対する教育効果の検証」「ダウトパーソンの役割遂行に対する教育効果の検証」「教育プログラムの因子構造の検証」であった。４つの検証は、いずれも肯定的な結果になり、教育プログラムの妥当性や教育効果が示唆されることになった。

Abstract

Study on an educational program that increases tolerance by promoting self-understanding and understanding of others

The School of Graduate Studies,
The Open University of Japan
Yoichi SUGIMOTO

Humans are social animals. Through helping one another in a group, humans have achieved things that cannot be done alone and adapted to the environment. However, conflicts and discords often have to be overcome in this social interaction. The nature and tendency of being tolerant are important in this sense.

On the other hand, as society is diversifying and changing rapidly, it is becoming more and more necessary for people with knowledge and experience in different fields to create value. In this regard, it goes beyond fostering tolerance to others, and it becomes important to prompt "to accept the heterogeneity of others which is different from oneself and the heterogeneity of oneself which is different from others with respect" (operational definition of tolerance in this research) and it becomes important to enhance the knowledge and intentionality to understand and utilize the differences in characteristics between oneself and others. The educational program of this research that examined the educational effect was a methodology that prompted a constructive and mutually beneficial collaboration by making it easier to understand and be convinced of the cause and its usage, even if a person feels something different between the person and others.

This educational program was developed as a basic educational subject that first-year students of the Faculty of Engineering and Design of "K" University take as a compulsory subject. The main features of this educational program are the following three approaches taken in the design of the educational program. The first is to position "self-understanding, understanding of others, and improvement of tolerance" as the critical steps of the educational program, based on "model 1 of unit design" by use of the "dimensions of learning."

For this purpose, the relationship between individual learning

outcomes of "self-understanding," "understanding of others," and "improvement of tolerance" was assumed as follows. First, self-understanding is promoted by using the three dimensions of type theory as coordinate axes. By deepening self-understanding, understanding of others also deepens. In addition, the opposite relationship occurs in which self-understanding deepens as the understanding of others deepens. It was an assumption that tolerance is fostered and improved through (or as a result) a process in which "self-understanding" and "understanding of others" are promoted stepwise and cyclical.

The purpose of this study was to verify and examine this assumption. In addition, to smoothly link the improvement of tolerance to the improvement of psychological safety within the group, the learner should behave in a situation-adaptive manner, assuming the outcome of the interaction while considering the characteristics of oneself and others. The author thought it would be essential to go and improve the reproducibility of success by verbalizing the introspection of the experience.

The second is that the introduction and use of Jungian type theory were kept to the minimum necessary by thinking "bottom line." The author decided to treat the type theory as a low-end type specification. This was also necessary to facilitate the implementation of educational programs. Third, an ethical adherence to the use of Jungian type theory was handled with the greatest care. For example, a danger exists in "labeling" one's own and other types. When type theory was used, the author gave sufficient explanation and guidance to prevent the situation. An educational program with all three approaches has not been conducted in previous studies in Japan and abroad. That was the motivation for developing the educational program.

As the educational program has been conducted for the last four years since its introduction to the educational field, and the collected data has been accumulated (1,188 students in total), it was decided to verify and examine the educational effect. For the verification, the author has set three research subjects corresponding to "self-understanding," "understanding of others," and "improvement of tolerance" and seven verification hypotheses in total. In addition, a verification conducted separately from the verification hypothesis is also presented as a supplement in the final chapter. This study intends to verify whether an educational program that attempts to promote self-understanding, understanding of others, and improvement of tolerance in a stepwise and cyclical manner using Jungian type theory work effectively as a prototype.

This paper is composed of 6 chapters. First, in the first half (from the introductory chapter to the 2nd chapter), the fundamental recognition and research subject of this research, the position of this research, the purpose of this research, the explanation of the main constructs and previous research, operational definition of terms, development purpose, design outline, curriculum content, and implementation status of the educational program are clarified. Next, in the latter half (from Chapter 3 to the Final Chapter), research design, outline and procedure of verification, ethical consideration, verification results and consideration of each verification hypothesis, a summary of each chapter, results, and considerations of this research, prospects, attachment are presented. The followings describe the details :

In the introductory chapter, the level and scope regarding "tolerance" on the educational program are clarified and explained why Jungian type theory was selected and introduced into the program while focusing on cognitive style to increase tolerance. Then, after showing the essential recognition of this research, three research subjects for examining the educational program are clarified. In addition, the previous research, the position of this research, and the purpose of the research are shown.

Chapter 1 examines the literature on critical concepts related to educational programs. Described are such concepts as citizenship education related to tolerance improvement, Jungian type theory introduced and used as a framework for self-understanding and understanding of others, and "MBTI" and "teamology" as previous studies. In addition, by showing the awareness of the problems about the previous research, the viewpoints that the author attempts to emphasize and differences from previous studies are clarified.

Chapter 2 shows the awareness of the problems behind the development of the educational program, and the basic idea of the development purpose and its design are clarified. A standard curriculum and operational considerations are also presented. The themes dealt with in the exercises are explained, and the missions (task instruction sheet) used in the exercises are shown. Finally, an overview of the implementation status of the education program so far is shown.

Chapter 3 shows that the research design is a quantitative study. Then, the verification procedure of seven verification hypotheses (= expected educational effects) set based on the three research subjects is shown. In the explanation of the verification procedure, the research subjects, the educational contents provided, the contents of the expected educational effect,

the verification methods used to confirm the educational effects, and the verification methods for the additional evidence are shown. The three research subjects and seven verification hypotheses are as shown below, where a serial number is put on each verification Hypothesis.

[Research subject 1: Confirm the effect of the educational program on self-understanding] ① "Verification Hypothesis 1: Educational programs will foster learners to have a hypothesis of the own preferred type of mental attitude dimension", ② "Verification Hypothesis 2: Educational programs will foster learners to have a hypothesis of the own preferred type of perception dimension", ③ "Verification Hypothesis 3: Educational programs will foster learners to have a hypothesis of the own preferred type of Judgment dimension."

[Research subject 2: Confirm the effect of the educational program on understanding others] ① "Verification Hypothesis 4: Educational programs make it possible to estimate the (true) types of others", ② "Verification Hypothesis 5: Educational programs make it possible to enable learners to think about the interaction's influence on others' types caused by typical behavior of own type", ③ "Verification Hypothesis 6: Educational programs make it possible to enable learners to think about the interaction's influence on own type caused by typical behavior of other types."

[Research subject 3: Confirm the effect of educational programs on improving tolerance] ① "Verification Hypothesis 7: Tolerance nurtured by an educational program shows learners' verbalized consciousness based on obtained learning results." At the end of this chapter, it is stated that the Research Ethics Review Board has approved this study.

In Chapter 4, the results of verifying the verification hypothesis (analytical subjects, verification results of educational effects, results of verification conducted as supporting evidence) are shown and discussed according to the verification procedure presented in Chapter 3. As a general rule, the analysis subjects were students who obtained credits for the 4th year of the educational program. The outline of the results and considerations are as follows.

Regarding verification hypothesis 1, verification hypothesis 2, and verification hypothesis 3, two aspects have been verified, such as "whether or not the own type of hypothesis construction is feasible" and "contents of the reason for their hypothesis construction." All of the analysis subjects constructed their hypothesis type by logic based on the learning contents of type theory.

For verification hypothesis 4, the degree of the method's understanding for estimating the others' types has been verified. Since the ratio of the higher evaluation values of the self-evaluation of the analysis subjects exceeded 80%, it was implicated that the understanding level of the entire analysis subjects has reached a level with no problems from the viewpoint of general distribution.

Regarding the verification hypothesis 5, it has been verified whether learners think that their own "behavior," which is an expression of their type, may cause a human error for the type of others. All the analysis subjects made concrete descriptions using the framework of type theory as a coordinate axis. In addition, the verification conducted as a corroboration showed that the description contents of the specific combinations of self and other types had characteristic patterns.

Regarding the verification hypothesis 6, it has been verified whether learners are able to think that other's "behavior," which is an expression of their type, may cause a human error for the own type. All the analysis subjects made concrete descriptions using the framework of type theory as a coordinate axis. In addition, the verification conducted as a corroboration showed that the description contents of the specific combinations of self and other types possess characteristic patterns.

Regarding the verification hypothesis 7, it was verified whether or not the word indicating tolerance cultivated by the educational program is to be confirmed in the text data that aggregates the free description of the term-end report of the analysis subjects. Interpreting the results obtained by quantitative text analysis (frequent words, words with similar appearance patterns, words with a substantial degree of co-occurrence), it has been confirmed that consciousness existed to accept the heterogeneity between oneself and others with esteem. Furthermore, it has been found that the intentionality of connecting the heterogeneity in order to mutual benefits was activated.

Contests of each chapter are summarized in the final chapter. The results and issues of this research and prospects are described. The following five results have been obtained by examining the educational effects of the educational program. First, it has been verified that the educational program is effective for self-understanding. Second, it has been verified that the educational program is effective in understanding others. Third, it has been verified that the educational program effectively increases tolerance. Fourth, it has been verified that the educational program is able to prompt the

expected educational effects by the program designed by a low-end specification of the type theory. Fifth, these confirmations of the effects have become a preparation for social implementation.

Next, regarding the central issue of this research, it has been found necessary to expand the subjects' scope to generalize the verification results. The issue has been found as a two-sided relationship with the limits of this research. As for prospects, it is stated that tasks such as improving the educational program to meet educational needs and its implementation in a society will be conducted. Its purpose is to prevent differences in types (cognitive styles) from causing conflicts and utilize them as cognitive resources prompting reciprocity and social ties.

Finally, after explaining that the study has been completed by verifying the above seven verification hypotheses, the results and considerations of the four verifications conducted from the viewpoint of additional confirmations of the validity and educational effect are presented as a supplement. The four verifications are "verification of the educational effect on leadership demonstration," "verification of the educational effect on followership demonstration," "verification of the educational effect on the role performance of doubt-person," and "verification of the factor structure of the educational program." All four verifications have shown results that suggest the validity and educational effect of the educational program.

博士論文審査及び試験の結果の要旨

学位申請者

放送大学大学院文化科学研究科

文化科学専攻　生活健康科学プログラム

氏名　杉本　洋一

論文題目

自己理解・他者理解の促進を通じて寛容性を高める教育プログラムについての検討

審査委員氏名

・主査（放送大学教授　医学博士）　石丸　昌彦

・副査（放送大学教授　博士（学術））　奈良　由美子

・副査（放送大学教授　社会学博士）　坂井　素思

・副査（首都大学東京／東京都立科学技術大学名誉教授　工学博士）
福田　収一

論文審査及び試験の結果

本研究の目的は、生産的なチームワークの基盤となるべき寛容性を高めることを目的とした大学生の教育プログラムを開発し、その教育効果を検討することである。この目的に沿って執筆された論文の構成と内容は、以下のように要約される。

第１章　文献検討：

教育プログラムにかかわる鍵概念の文献検討を行った章である。具体的には、寛容性育成に関連するシティズンシップ教育、自己理解・他者理解の枠組みとし

て導入・利用したユングのタイプ論、先行研究である MBTI と Teamology をとりあげて論じた。これら先行研究のレビューを通して、本研究が開発しようとする教育プログラムがユングのタイプ論を援用するものであり、それによって個人間の差異を理解するための共有可能な認識枠の提示を目ざすことを明らかにした。

第２章　検討対象の「自己理解・他者理解の促進を通じて寛容性を高める教育プログラム」:

教育プログラム開発の背景となった基本的な問題意識は、いかにして個人間の差異を対立や葛藤に結びつけず、円滑な協働を実現するかというところにある。そこから出発してマルザーノらによる「思考の次元」「学習の次元」の考え方を援用して教育プログラムを構成したことを示し、これにもとづく具体的なカリキュラムと運営上の留意点、講義でとり扱うテーマ、さらには演習で使用するミッション（チームが制限時間内に達成すべき課題と実施上の留意点を書いた指示書）を提示した。最後に、教育プログラムの実施状況を報告した。

第３章　研究方法：

研究デザインとして量的研究方法を採用すること、具体的には下記の通り、３つの研究課題のもとに合計８つの検証仮説を立て、これらを順次検証する形で研究を進めていくことを説明した章である。

【研究課題 1：自己理解についての教育プログラムの効果を検証すること】

① 検証仮説 1 「教育プログラムにより、構えのタイプの仮説がもてるようになる」

② 検証仮説 2 「教育プログラムにより、知覚機能のタイプの仮説がもてるようになる」

③ 検証仮説 3 「教育プログラムにより、判断機能のタイプの仮説がもてるようになる」

【研究課題 2：他者理解についての教育プログラムの効果を検証すること】

① 検証仮説 4 「教育プログラムにより、他者のタイプを推定できるようになる」

② 検証仮説 5「教育プログラムにより、自己のタイプが他者のタイプに与える相互作用を考えられるようになる」

③ 検証仮説 6 「教育プログラムにより、他者のタイプが自己のタイプに与える相互作用を考えられるようになる」

【研究課題 3 : 寛容性を高めることについての教育プログラムの効果を検証すること】

① 検証仮説 7「教育プログラムにより育成された寛容性が、言語化されて意

識されていることを確認できる」

② 検証仮説 8「教育プログラムにより育成された寛容性が、タイプによって違った特徴をもつことを確認できる」

検証すべき仮説は以上８つである。

第４章　結果と考察：

第３章で示した手順にもとづいて仮説の検証を行い、８つの検証仮説ごとに分析対象者、検証方法、検証結果、考察を示した。その概要は以下の通りである。分析対象者は、原則として教育プログラム実施 4 年目の履修単位取得者とした。

検証仮説 1、検証仮説 2、検証仮説 3 については、「タイプの仮説構築の有無」と「仮説構築の理由の記述内容」に注目して検証を行った。その結果、分析対象者全員が、タイプ論の講義内容を踏まえたロジックにより仮説タイプを構築できていた。

検証仮説 4 については、他者のタイプを推定する方法の理解程度を検証した。その結果、分析対象者の自己評価の上位評値の割合が 8 割を超えたことなどから、分析対象者の理解は満足すべき水準に到達していることが示唆された。

検証仮説 5 については、自己のタイプらしさのあらわれである「ふるまい」が、他者のタイプにとってはヒューマンエラーの起因になるようなことを、他者の身になって考えられるか否かについて検証した。その結果、分析対象者全員が、タイプ論のフレームワークを座標軸にして具体的な記述をすることができていた。また、その記述内容は、自他のタイプの組み合わせによって一定の特徴を示すことが示唆された。

検証仮説 6 については、「他者のタイプらしさのあらわれであるような「ふるまい」が、自己のタイプにとってはヒューマンエラーの原因となりうる」といった状況をイメージできるか否かを検証した。その結果、分析対象者全員が、タイプ論のフレームワークを座標軸にして具体的な記述をすることができていた。また、その記述内容には、自他のタイプの組み合わせによって一定の特徴があることも示された。

検証仮説 7 については、分析対象者全員の期末レポートの自由記述を集約したテキストデータをもとに、階層的クラスター分析により出現パターンの似通った語を、また、共起ネットワーク分析により共起の程度の強い語を探索した。その結果、自他の間の異質性を認容しようとする志向や、協働において異質性を互恵につなげていこうとする志向が確認できた。

検証仮説 8 については、抽出語と外部変数（履修者の寛容性の変化度合いを表す数字と履修者のタイプを組み合わせてつくった変数）との対応関係を、検証仮説 7 と同じテキストデータを用いて対応分析により検証した。その結果、構

え・知覚機能・判断機能の仮説タイプごとに一定の特徴があることが確認できた。

終章　総合考察：

前章までの要約を示したうえで、本研究の成果と課題、今後の展望を述べた。すなわち本研究において提示した教育プログラムは、自己理解・他者理解・寛容性をそれぞれ高める効果があることが示唆された。本プログラムがローエンド型の仕様である利点を活かし、今後は社会実装への展開を試みていきたいとの展望が示された。

以上の内容を確認したうえで審査が行われた。

まず、本論文の評価すべき点として下記が指摘された。

1. チームワークの協働性を高める条件に注目した着眼の良さと、これを独自の視点からオリジナルな教育プログラムに結実させた独創性は、特筆すべきものであること。
2. 大学教育の場で長年にわたって実証実験を繰返し、膨大なデータを蓄積してきた努力と誠実な研究姿勢は評価に値すること。
3. 自己理解・他者理解・寛容性という立体的・複眼的な視点から、データを深く読み込んでいること。
4. ユングのタイプ論を実証的な研究に活用するという困難な作業を忍耐強く進め、これまでにないユニークな成果に結びつけていること。

一方、本論文の問題点ないし課題として以下が指摘された。

1. タイトルに含まれている重要な概念である「寛容」の定義、ならびにその定義に用いられている「認容」という言葉の意味がやや不明確である。「協働」の重要性は論文から伝わってくるが、「寛容」をテーマとしてとりあげる必然性については補強することが望ましい。
2. 寛容の要素として多くのものが挙げ得る中で、特に「認知スタイル」に着目する理由について、より明確に示すことが望ましい。
3. ユング理論を含め、およそ人間のタイプは静的・固定的なものではなく、人と人との相互作用の中で生成されるものであり、従ってダイナミックに変化するものと考えられるが、そのような視点からの考察が含まれていない。
4. 教育プログラムの有効性を検証するためには、当該プログラムを実施しない対照群を設けるなり、実施前と実施後で比較するなりの工夫を行うことが望ましく、そうすることによってより簡単かつ明瞭に有効性を示し得たのではないか。
5. 本研究は、単に既存の教育プログラムの効果を検証したものではなく、新

たなプログラムを開発したうえでその効果を自ら実証したものである。その点を表題に示すとともに、本文中でも本研究の新規性・独創性を十分に展開することが望ましい。

これらの点に関して十分な時間をかけて議論した結果、指摘の 1、2 については本論文の修正加筆によって改善可能であり、3、4、5 については今後の課題とするのが妥当であると判断された。すなわち本論文は、総体としてユニークで意義ある内容を適切な形で表現し得たものといえる。口頭試問における発表は明快であり、質疑に対する応答も明晰であった。

以上より審査員一同は、本論文が博士号を授与するに値するものであるとの結論において一致した。

以上